



自分が親だったら、できない気がする。

---

わたしは、甘えん坊

いつも、母親のそばにいます。

人見知りで内向的。

人が多いところは、大嫌い。

学校行っても、いつも泣いて帰ってくる。

スポーツできても、勉強できない。

だから、

「学校行きたくない」、って、

よく言う。

温かい日差しが降り注ぐ、

小学2年の5月。

今日は、何だか

「学校に行きたくない。」

朝から、泣きちらして、

母に訴える。

母も負けじと、学校に行かせようと

無理やり着替えをさせようとする。

だが、その日の私は、一味違っていた。

脳は、身体の安全のため、最大でも、

力の80%しか出せないように

制御しているらしい。

しかし、そのときの私は、

100%の力で抵抗していた。

さすがに母も諦めた。

平日ですが、

学校に行かないことが

決定した瞬間だった。

朝の激しい攻防も落ち着き、

昼頃になると、

母が突然、

「公園に行こう」

と、言い出しました。

見ると、そこには、

銀紙に包まれた、

できたてのおにぎりと水筒が

置いてありました。

「うん！！」

わたしは、喜んでうなずきました。

普段遊んでいる公園よりも、遠く、

今までに行ったことのない、

大きな公園でした。

母に連れられて向かった場所は、

整ったキレイな芝生と、湧水が流れる広場でした。

「おにぎり食べよっか！」

母に差し出されたおにぎりを

猛烈な勢いで食べる。

お腹が満たされたところで、

「なぜ、今日学校に行きたくなかったのか」、

母に尋ねられる

ことはなかった。

そこにあるのは、

温かい日差しと、

きれいな湧水に足をつっこむ、

お腹が満たされた状態の

母と子。

何をするでもなく、

何をいうでもなく、

平日の真昼間に

ポッーーーーと空を眺める

母と子。

学校に行く気力がなくなっていたわたしが、

もっとも欲しかった時間

それを与えてくれた

# すごい母親

なんです。



その道を通る確率 20%

---

今日の天気予報

くもり

降水確率

50%

「雨降るかも知れないから、傘持ってきてなさい」

「大丈夫。今降ってないから」

こんな成立していない会話は当たり前だった、

小学3年生の冬。

その日のわたしは、

降水確率50%という微妙な空模様でも、

なぜか、雨が降らないと自信をもっていた。

学校に着き、午前中の授業が始まる。

雨は降っていない。

このままいけば、わたしの勝ちだ。

天気と勝負を挑む小3の冬。

授業が終わり、下校する頃には、

わたしの負けが決まっていた。

まあまあの雨量。

傘もってない。

人に借りるなんて、夢のようなことは、

考えてもいなかった。

内向的な人間が次に取る行動は、

決まっていた。

走

ちなみにわたしの家と学校までの距離は、

学年で1番遠かった。

「そのため、帰り道のルートはたくさんあった。」

走ることには、自信があったが、

志半ばで、バテる。

そこからは、何の抵抗もせず、

ただただ、雨水にボコボコにされる。

心が冷え切っているとき、数十メートル先に、

車が見えた。

そのときは、行く手を阻む障害物にしか見えなかったが、

近づいていくにつれ、見慣れた車であることに気付く。

？

うちのくるま？

いやいや、そんなはずはない。

わたしが今日、この帰り道を選んで、

下校することは知らないはず。

先回りなんて、できるわけがない。

疑いに満ち溢れた表情で、

もう一度、注意深く車をみる

運転席に

母が座っている。

「えっ!？」

嬉しくなって、急いで車のドアを開ける。

「寒かったですよ。早く乗りなさい。」

その言葉と同時に暖めてあった、

ホッカイ口を手渡される。

嬉しくて嬉しくて、どうすればいいかわからない。

「ありがとう」の一言が

恥ずかしくて、いえない。

わたしができることは、

母の隣で、無邪気に喜ぶだけ。

そしてこの日以降、

雨の日に母が迎えにくることはなかった。

それでもわたしは、

雨が降ると決まって、

母が迎えにきてくれたルートを選んで

帰るのです。

なぜ、自分の思い通りになると思ったのだろう。

---

計算が苦手で、

体育が得意だった、

わたし。

計算が苦手で、

音楽が得意だった、

はは。

ある種の遺伝を感じた

小5の秋。

家庭訪問で、うちに先生が来ていた。

わたしは外で、友達と遊んでいた。

先生が帰り、母に何を話していたのか、

聞いてみた。

「お母さん、音楽の先生になるんだよ」



# は？

わたしの母は、昔、音大に通っていて、

ある程度のことは、教えることができる。

そのことを聞いた担任が、秋に行われる

合唱際の特別講師として、

我がクラスの合唱指導をしてもらえないかと、

お願いしたのである。

小さい頃から、音楽の先生になりたかった、

母にとって、願ってもないチャンスだった。

何も考えず、二つ返事をした母だったが、

反抗期を迎え出したわたしの心は、

複雑な思いを抱えていた。

しばらくすると、本格的な練習が始まり、

母が学校にやってきた。

音楽室に移動し、早速、合唱の指導を始める。

和気あいあいとした雰囲気、指導が始まり、

無事に終わる。

そして、その後、驚くべきことが起こった。

クラス中から母が称賛されたのである。

仲の良い友達から、あまり話したことのない子まで。

母の子どもの扱いのうまさには

脱の帽のすけである。

めったに起きない出来事に、

「いやいや、全然良い母親じゃないよ」、と

嬉しさを隠しながら言う、わたし。

これぞ、

## THE 思春期。

そして、この思春期が災いをもたらすことになる。

合唱の練習が進み、順調に進めば進むほど、

母の評価が、うなぎのぼりになる。

わたしは段々と、

母が学校にくることに、

抵抗を感じるようになる。

母親が褒められる気恥ずかしさに

耐えられなくなってきたのである。

そして、底なしのように上がっていく、

母の評価を自分がわがままになることで、

落とそうとしたのである。

その具体的な方法とは・・・

## 合唱際不参加。

自分で言うのもアレですが、

スケールが小さい。

それでも、クラス全員絶対参加の行事を

何の理由もなく休むわけなので、

度胸と根性がある行動である。

合唱際当日。

予告通り、わたしは行事を休み、

家でゲーム三昧。

母は、テープレコーダーを持って、

合唱際が行われるホールへ。

翌日、わたしは何事もなかったように、

教室へ入る。

予想通り、非難を浴びる。

小5が負うリスクにしては、

いささかハードなものではあったが、

母の評価が下がる、という

リターンは得られた

はずだった。

実際は、わたしが非難を浴びた分だけ、

相対的に母の評価が上がり、

その日、合唱際が終わったにも関わらず、

母の人気はピークを迎えるのだった。

## 片付けられない主婦

---

あれ？

うちって・・・

汚い？

と感じた中2の冬。

その日のわたしは、

やる気に満ち溢れていた。

なぜなら、自分の部屋以外の場所に、

掃除機をかけていたのである。

まさに、おとなの階段を上り始めていた。

わたしの家では、母が減多に掃除をしないため、

不衛生な状態が当たり前であった。

洗濯機も、週1しか働かない。

贅沢な洗濯機である。

そんな家庭なので、掃除機をかけるのにも、

一苦勞。

まず、床に母の私物が溢れていて、

掃除機がかけられない。

物をどかせばいいと考える。

物をどかしてみる。

「母がキレル」



もはや、キレルのは若者だけではない。

家を清潔に、キレイにしようとしている人間に、

「キレル」

さすがの理不尽さに私も言葉を返す。

結果的に、

「勝手に、掃除を始めた私が悪い」、

ということになった。

自分の家を掃除するのに、

予約が必要となる、

稀なケースである。

その日の掃除は、断念することとなったが、

翌日の朝、母は少し反省していたようであった。

それは、わたしが掃除機をかけようとしていた部分に、

スペースができていたからである。

ただ、物が捨てられて、スペースができていたわけではない。

母は、激安の殿堂

ドンキホーテが採用している、

圧縮陳列を行っていたのである。

将来の夢は、何ですか？

「サッカー選手です！！」

そう答えていたことを思い出した、

中3の1学期。

いよいよ、義務教育を終える時期が来てしまいました。

わたしの成績は、相変わらずのオール2・・・

すいません。

見栄を張ってしまいました。

数学と理科と英語は、

1です。

ただ、体育だけは、

ほぼ実技のみの得点で、

3を取っていました。

唯一の自慢です。

この頃になると、周りの友達も、

受験を控え、忙しくなる。

わたしは、遊び相手が減る分、暇になる。

そんな状況が変わらないまま、

受験を向かえ、

わたしは、願書を出せば、

誰でも受かれると噂の定時制高校に

入学した。

入学式当日。

下駄箱で、上履きに履きかえようとしていたとき、

斜め後ろから、聞き慣れない声がした。

「ういっすーよろしくな〜」

今日から、同じ学年として、

定時制に通う、同級生の声だった。

慌てて、うしろを振り返ると、

27、8歳の肌が黒く焼けた、

葉加瀬太郎似の人がこっちを向いていた。

※わたしは、当時15歳です。

定時制に通う気力が20%ほどあったが、

それが、0%になった瞬間であった。

その夜、

わたしは、うなされていた。

葉加瀬太郎似の同級生が夢に出てきたからである。

というより、夢では何故か、

葉加瀬太郎本人が同級生になっていた。

彼は夢の中で、こういった。

「やきそばパン買ってこい」

わたしは、ダッシュで廊下を走る。

大急ぎで、やきそばパンを届けると、

彼は、こういった。

「あんぱん買ってこい」

わたしは、ダッシュで廊下を走る。

大急ぎで、あんぱんを届けると、

彼は、こういった。

「牛乳買ってこい」

張り込みでもするのかと

強く思った瞬間、

目が覚めた。



よし、学校へ行くのはやめよう。

そこには、断固たる決意があった。

登校日初日、

わたしは、ずっと家にいた。

「今日、学校でしょ？」

母が尋ねる。

「うん。」、と答えるわたし。

それ以降、何の会話もなく、

いつも通り、夕食を共にする。

いつも通り、テレビをみて、

いつも通り、お風呂に入って、

いつも通り、寝る。

こんなことを1ヶ月は続けていた。

すると、様子がおかしいことに気がついた父が、

わたしに説教をはじめた。

「将来どうするんだ」

「・・・」

「中卒じゃあ、雇ってもらえるところが限られるぞ」

「・・・」

「とりあえず、高校だけでも、卒業しろ」

「・・・」

「何かやりたいことでもあるのか」

「ない」

こうして、わたしは、

高校を中途退学することが決まった。

はじめてのあるばいと

---

何もやることがなかった

15歳の夏。

義務教育という囲いがなくなり、

完全に自由の身となったわたし。

開放感に浸っていると、

母が衝撃的な言葉を言い放った。

「学校行ってないんだから、

お小遣いはあげないわよ」

まったく、想定していなかった言葉だった。

「そそそそんなこと、わかっているよ！！！」

間違えようのない動揺がみえていた。

まさか、母が兵量攻めをしてくるとは思わなかった。

「そうだ、バイトをしよう」

京都へ行く気分で、

求人チラシを見る。

近場で、楽そうなバイトは・・・

## 「大手英会話教室のポスター貼り」

- ・完全出来高制
- ・ポスター1枚につき、400円の報酬
- ・指定配布エリア内で、個人商店などを中心に、飛び込みで、ポスター貼りの許可を頂く。

今、考えると、とんでもないバイトをしていた。

英会話教室の事務所に入ると、

安めぐみ似の可愛いくて、優しそうなお姉さんが、

簡単な説明を始めてくれた。

こんな人が講師だったら、

英語習ってみたい。

和やかな空気で、説明が終わり、

あとは、ひたすら飛び込み営業。

はじめてのアルバイト

3ヶ月間で、

8000円。

気付くと、手には受話器があった。

「プルルル、プルルル」

「ガチャ」

「英会話の〇〇〇〇です。」

(あっ! あのお姉さんだ・・・)

「あの・・・〇〇ですが、  
ポスター貼りのアルバイト辞めさせて頂けませんか。」

「えっ？どういうことですか？」

「いや、ちょっと、他のアルバイトをしたくて・・・」

(いや～な沈黙が流れる)

「は？」

「何言ってるの？」

お姉さんの口調が明らかに変わった。



「辞めたい？辞められるわけないでしょ？」

「辞めるなんて認められないから」

「早く、ポスター貼ってきなさいよ」

「いや・・・もうできません・・・辞めさせてください」

「だから、辞められないって言ってるでしょ！」

「どうしても、辞めたいなら、代替りの人間連れてきなさいよ」

「・・・」

※安めぐみが違法な借金取立てをしているイメージです。

怖い顔した人の脅しより恐いです。

すると、近くにいた父が、

「電話代わるか?」、とやってきたので、

何も言わずに、受話器を渡す。

「あの〇〇の父ですが、

仕事が辞められないっていうのは、

どういうことですか?

雇用契約にそんなこと書いてあるんですか?

明らかに、法律に違反してますよね?

どうしても、辞めさせられないというのなら、

出るところ、出てもいいんですよ。」

「すいません!!!

辞められないことはありません!!!

失礼致しました!!!

残りのお給料をお渡し致しますので、

事務所まで、お受け取りにきてください。」

おやじ

スゲー

## 面接のタブーに挑む16歳

---

その後、何の目標も無く、

バイトを転々としていた、

16歳。

何度も、面接を受けては、

何度も、面接に落ちる。

今、思い返すと、

わたしの面接は、

とても正直だった。

一番初めに面接を受けた、

ファミレスの皿洗いのバイト。

30代の若い店長さんが面接をしてくれた。

「えっと・・・」

「アルバイトって何かしたことありますか？」

「ありません。」

「そうなんですか～

皿洗いのアルバイトって、

一日に物すごい量のお皿を

洗ったりするから、

かなり大変な作業なんですよ。」

「大丈夫ですか？」

「・・・」

「もう1度、考えてみます。」

面接終了。

とりあえず、

「はい」って言わないところが、

とっても素直。

その1週間後、

今度は、コンビニの面接を受ける。

「何で、コンビニで働こうと思ったのですか？」

「ちょっと前に、ファミレスの皿洗いの面接を

受けたのですが、相当キツイと聞かされたので、

コンビニのほうが、楽だと思って、応募しました。」

「・・・」

「コンビニの仕事も、そんなに楽じゃないですよ」

面接終了。

よく言った。

面接で言ってはならないことを

# よく言った。

どっかにカメラ仕込んであったら、

大爆笑間違いない。

そんなこと言うヤツは、

コントの世界でしか見たことがない。

こんなことばかりしてたので、

まともなアルバイトは全て落とされる。

唯一続いていたバイトは、

デパートやビル内で行われる催事場の、

設営作業だった。

登録制のバイトだったので、

面接はあってないようなもの。

仕事をしたい日に電話をして、

現場に向かう。



こういう形のほうが、性に合っていたのか、

週4～5の割合で、定期的に仕事に行っていた。

そんな状態が2年近く続く。

「今更気付く」、こともある

---

その間、母は何も言わなかった。

変わりなく、接してくれた。

ホントは言いたいことがあったけど、

言わないようにしてたと思う。

それは、

「自分が育てた子どもを、心から信頼していたから」

母には自信があったのだろう。

マイペースなわたしの性格をととても理解していた。

ゆっくりでもいい。

遠回りしてもいい。

自分のペースで、

自分の納得する人生を送ってもらいたい。

そう母は、強く想って、

わたしを見守ってくれていたような気がする。

そうじゃなかったら、

ああしろ

こうしろ

色々言って、

何とかして、自分の作ったレールの上に、

乗せようとしていたはず。

もしも、そんなことをされていたら、

非行街道まっしぐら。

間違った方向に進んでいる人間を、

正しい道へ導いてやらなきゃならない、

そう思うのが、人間であり、親だと思う。

ただ、正解に見えるこの常識は、

不正解である。

そうやって、正しい道に導こうとしている人間も、

多くの間違いを犯して、生きてきたはず。

つまり、多くの間違いを犯してきたからこそ、

何が正しくて、何が悪いのか、を

判別できるようになった。

そんな貴重な経験を得る機会を、

自分のアドバイスによって、

失わせようとしているのは、

罪深いことであるとしたら、

いいようがない。

せっかく、間違いようとしているのだから、

間違えさせればいい。

それで、本人が過ちに気付ければ、

こんなに素晴らしいことはないのである。

問題は、間違えさせないようにすることではなく、

間違えた後に、

過ちに気付けるかどうか。

そこで、「信頼」、という言葉が出てくる。

自分の言葉で相手を説得しようとする行為は、

相手を信頼していない証です。

信頼しているのであれば、

相手が自分の力で、変わっていく姿を、

ずっと、待ってられるはずです。

※ただ、間違えたと本人が気付いていながらも、

間違いを犯してしまう場合は、

周囲の助けが必要だと思います。

母は、生活態度がだらしく、

天然ボケを炸裂させるような人間で、

「論理的」、という言葉からは、

かけ離れたような存在でしたが、

「強く人を信じることができる才能」、を

持ち合わせてたのではないかと、

今更、気付くのであります。



些細なことでも、転機は訪れる

---

目覚めて、テレビをつけると、

タモリさんが映っていた16歳の秋。

昼起きなんて、朝飯前。

相も変わらず、

危機感のない日々を迎えていたが、

それに終止符を打つ出来事がやってきた。

ある日、友達の家遊びに行くと、

新品のパソコンが置いてあった。

その横には、タイピングソフトも置いてあった。

このソフトは、ゲーム感覚で、

ブラインドタッチが覚えられるという、

優れものである。

あまりに友達が楽しそうにやっているので、



だんだん、欲しくなってきた。

幸いなことに、

我が家には、パソコンがある。

さっそく、電気屋に行って、

「タイプコップ」、という

タイピングソフトを買った。

その日から、父の部屋に置いてあるパソコンで、

ず-----と、

タイプコップをやっていた。

おかげで、

# ブラインドタッチを

完璧にマスターすることができた。

周りの人間を見渡しても、

キーボードを見ずに、

打てる人間は少ない。

これがきっかけで、

タイピングソフト以外のソフトにも、

挑戦したくなり、

父の本棚に置いてあった、

「WORD」、の参考書を読み始めた。

「興味があるから、

覚えたい。

知りたいから、

理解したい。」

「これが勉強をするってことなのか」、と

17歳になって初めて気付く。

その後、WORDの参考書を読破し、

内容を理解できた私は、

今までにない自信を身につけていた。

「やろうと思えば何でもできる」

そして、パソコンに携わる職業に就きたいと、

考えるようになった。

しかし、中卒でパソコン関連の仕事など、

存在しない。

「そうだ、高校へ行こう」

またしても、

京都へ行く気分で、

父に打ち明ける。

父は、過去にわたしが、

高校を中退した経緯もあって、

高校入学に反対気味だった。

「また、どうせ途中で辞めるだろうから、

そんなことにお金を使いたくない。」

そういう思いが強かったのだと思う。

そして、最後にこういった。

「母が良いというのなら、

入学すればいい。」

そして、恐る恐る母に聞いてみた。

「高校に入りたいんだけど・・・」

「高校って、どこの高校？」

「〇〇高校」

「〇〇高校だったら、

近いし、いいんじゃない!？」

「いいの??」

「高校入ってもいいの？」

「いいわよ!!」

「せっかく、入りたいっていつてるのを、

止める訳ないじゃない!!」

「じゃあお母さん、明日学校に行って、

入学のこと聞いてくるね!」

「うん!」

母は、満面の笑みで、

高校入学を認めた。

そっか。

母はこのときが来るのを

ずっと待ってたんだ。

もう一度、やり直したいって、

自分から言いだすの待ってたんだ。

高校を辞めてからの2年間、

自分を信じ続けてくれてたんだ。

その想いに答えるかのように、

わたしは、小中で止まっていた、

勉強の針を

猛烈に進め始めたのである。





## 2 コ上の高校生

---

高校1年生になった17歳の春。

高校を辞めなかったら、

高3になっていた17歳の春。

わたしは、クラス全員が2歳年下という

異例な状況下にいた。

入学前に決めていたこと。

自分の意見を強く持ち、

毅然とした態度で、接しよう。

そうすれば、うまいこといくだろう。

もともと、高校を中退する決断力をもっていた人間だけに、

こういう場面での肝の据わりかたは、

見事なものである。

入学式も終わり、クラス全体が落ち着き始めた頃、

後ろの席にいたクラスメイトと、

音楽の話題を話していたとき、

不意にその瞬間が訪れた。

「おれ、2コ上だから、好きな曲とか、

流行ってた曲とか違うかもね～」

瞬く間に、

わたしが2歳年上であることが周囲に認知される。

その後、すぐに泊りがけのレクリエーション行事があり、

そこでの自己紹介で、

正式にわたしが2歳年上であることを公表した。

周りの反応は、よく覚えていない。

というより、反応なんてどうでもよいことだった。

なぜなら、クラスに溶け込める自信があったからだ。

これに関しては、内向的な性格が活かされた結果だと思う。

もともと集団が苦手だったわたしは、

その環境に適応するために、

無意識の状態から、相手の性格や特徴を

知らぬ間に分析し、対応する能力を身に付けていた。

そして、こう思った。

このクラスに溶け込める。

今から振り返ってみても、

わたしの予想は

見事に的中していた。

気付いたときには、

2コ上という壁は、

有って無いような状態になっていた。

そんな訳で、人間関係に関しては、

なんの問題もなかった。

問題は、もっと他にあった。

それは、

「勉強」、である。

今まで、小学校、中学校と、

average 20点を取り続けていたわたしが、

それ以上の点数を取ることができるのだろうか。

これは、わたしが17年間、周りの人間に貼られ、

また自らにも貼っていた、

勉強ができない、という

「レッテル」、である。

高校に再入学しても尚、

このレッテルを背負おうとは思っていない。

むしろ、このレッテルを剥がしに、

入学し直したようなものだ。

毎日毎日、授業を真面目に聞き、

わからないところは、質問し、

予習復習を欠かさない。

今までしてこなかった勉強の時間を

取り戻すように、必死で授業に臨む。

初めての中間テスト。

テスト1週間前。

中学時代であつたら、

何も気にせず、遊び呆けていたが、

今は違う。

あのと看、周りが必死になって暗記して、

脳みそに詰め込もうとしていた気持ちが、

手に取るようにわかる。

並々ならぬ覚悟で臨んだ初めての中間テスト。

その結果、

全教科90点以上。

クラスどころか、

学年で1位。

わたしは、完全にレッテルを剥がした。

そして、今までには考えられなかった、

「ちょっとしたエリート意識」、

のようなものが身についていた。

## 歌うたいの母

---

エリート意識に偏差値は関係ないと感じた、

高3の夏。

わたしは、勉学に勤しみ、

母は、歌の練習に勤しんでいた。

なぜなら、音楽の講師をしている友人と、

定期的に、老人ホームや幼稚園などで、

ミニコンサートを開くからである。

そんなこともあって、

この頃になると、

母が母親として機能しなくなっていた。

母が家庭内でやることといたら、

かろうじて、晩御飯を作るぐらいである。

もちろん、気分によっては作らないこともある。

ただ、それを不満に思うことはなかった。



それは、わたしが母を

1 人の人間として、

見ていたからである。

母は、自分の好きなことを自由にやる人間です。

そして、その子どもが、自分の好きなことを自由にやる、

わたしです。

全国の母を担っているかたに、伝えたいことがあります。

基本的に、中学校まで、子どもの面倒をしっかりとみていれば、

高校からは、自分の好きなことを思いっきりやって、問題ないと思います。

たぶん、グレませんので。

そんなことで、

好きなことを思いっきりやっている母は、

いつも、当日行った歌の練習内容を

テープレコーダーに録って、

自宅で聴いていました。

練習の合間に友人と話をしている場面では、

常に、腹抱えるほど笑っていました。

何がそんなに楽しいのかわからないほど、

笑っていました。

今はもう亡くなっているので、

生の声は聞けませんが、

自宅にある何百本というテープの中に、

楽しそうに歌の練習をしている母の声が

収められています。

今も、テープの笑い声を聞くと、

ちょっと、元気になれます。

それは、

母が訳わからないことで、

大爆笑しているからです。

故人の声を聞いたからといって、

悲しい気分になる常識は、

わたしには通用しません。

この場を借りて、

こんなにも楽しい時間をくれた、

母の友人というか、

親友に感謝します。

いい加減な母の友達をして頂いて、

ありがとうございました。

もしも、娘ができたなら

---

パソコンを使った仕事に就くために、

高校に入り、

心理系の大学に入学した、

大学1年の夏。

わたしは、カウンセラーになろうとしていた。

そのためには、大学を卒業し、大学院に進み、

臨床心理士を目指さなければならない。

そんな淡い夢を乗せた学生生活が始まった頃、

わたしの家庭では、

ある異変が起きていた。

わたしには、兄が1人いる。

その兄には、彼女がいる。

その彼女が自宅に泊まる。

そして、次の日になる。

朝起きる。

父が仕事に行く。

母はリビングにいる。

兄が出かける。

彼女は

リビングにいる。

普通に

リビングにいる。

そして、母と楽しく会話をしている。

その後、この光景を1年間みることになる。

嫁姑問題っていうのは、

テレビの世界の話なのでしょうか。

兄の彼女とはいえ、

ふつう、母親って嫌がりませんか？

嫌がるどころか、大喜びです。

そして、いつの間にやら、

彼女用のお茶碗と、

彼女用のおわんと、

彼女用のコップまで、

用意されていました。

終いには、合鍵まで持ってます。

もうすっかり、家族の一員です。

母にとってみれば、

1年間という期限付きの、



「もしも、娘ができたなら体験」、です。

期限がついている理由は、

1年後に、兄と彼女が別れるから

ではありません。

1年後に

母が亡くなるからです。



両親と最後に交わした言葉は何ですか？

---

大学2年の冬。

テレビをつけると、M-1が放送されていた。

その日は、家族と親戚が集まり、

お寿司を食べながら、

みんなで漫才を見た。

次の日の朝、

いつもであれば、

起きている時間に

母が起きてこない。

リビングで、テレビをみていると、

母がようやく姿を見せる。

若干、元気がなさそうにみえたが、

気になるほどではなかった。

しばらくすると、

母はパートに出かける準備を始め、

いつも通り、家を出た。

わたしも、夕方から近所のアルバイト先に向かう。

兄も出かけており、

家には仕事が休みであった、父だけがいた。

夜8時。

わたしのアルバイトが終わり、

10分後には家につく。

階段を上り、自分の部屋に向かう途中、

部屋にいた母の姿が目に入った。

すごく、苦しんでいた。

「どうしたの？」

「・・・」

「お腹が・・・いたい・・・」

隣の部屋にいた父に状況を聞くと、

母は仕事中に急に腹痛を訴え、

会社を早退してきたらしい。

その後、父がかかりつけの病院に連れて行き、

診察してもらい、

季節性の風邪であると診断を受けたらしい。

とても辛そうではあったが、

風邪だったら治るだろうと、

少し安心した気持ちでいた。

その夜、

10時を回り、

11時を回り、

12時を回っても、

母の苦しさは、

良くなるどころか、

悪くなっていった。

息をするのがやっとの状態で、

尋常でない苦しみ方をしていた。

わたしは、高熱が出ているのではないかと思い、

母のおでこに、そっと手をやった。

その瞬間、衝撃が走った。

金属に触れたかのように、

母のおでこが、冷たかったからだ。

さすがに、この状況は危険だと判断した父が、

救急車を呼んだ。

そして程なく、救急車が到着した。

さっそく、救急隊が母を担架で運ぼうとしたとき、

母がわたしに何かを話しかけた。

「・・・きだ・・・し・・・」

「しん・・・けん・・・」

まともに、声すら出せない状況で

母は必死に何かを伝えようとしていた。

「ひきだ・・・し」

「しんさ・・・けん」

！？

# 「引き出しに診察券！？」

母は苦しみながら、うなずく。

急いで、引き出しをあけると、

そこには、母が通っている病院の

診察券があった。

こんな非常事態のときに、

そんな心配しなくていいのに。

そして、この会話が

わたしと母の、

最後の会話となった。



人間は、自分のことを守る生き物です

---

寒空のなか、

救急車には、父だけが乗った。

わたしは、慌しかった真夜中に

終止符を打つかのように、

床についた。

翌朝。

父が病院から電話をしてきた。

話を聞くと、母の容態は非常に悪く、

ヘタをすれば、

術中死をしていたかもしれないぐらいであった。

そして、話の中で、

「腸閉塞」、という

聞き慣れない病名が告げられた。

電話を切ったあと、すぐに、

インターネットで、腸閉塞を調べる。

「食べ物がうまく消化されずに、

腸に詰まってしまう病気で、

症状が進行してしまった場合でも、

手術をすれば治ると書いてあった」

とりあえず、なんとかかなりそうよかった・・・

母は、日頃から便秘ぎみだったから、

それが原因だったのかもしれない。

と、安心したのも束の間、

最後の行にとんでもない1文が添えられていた。

「腸の内側に問題がある場合は、

# 大腸がん

の可能性があります。」

母が大腸がんが決まったわけではない。

父も大腸がんとはっていない。

でも、

実は、母は大腸がんで、

もう助からないかもしれない。

死ぬ。

母が死んでしまう。

そんなとき、わたしの脳は、

恐ろしい防衛本能をみせていた。

それは、

「母の死」を「母の死」、ではなく、

「他人の死」、という感覚で、

受け入れようとしていたのである。

例えるなら、

自分が知っている芸能人の

訃報を聞かされたきの感覚。

そのおかげで、

精神的なダメージは最小限に留められた。

すぐさま、病院にいき、父に質問をぶつける。

「腸閉塞って大腸がんが原因で起こってるんじゃないの？」

「・・・」

「そうかもしれないな・・・」

おそらく父は、わたしに電話をした時点で、

母が助からないことを知っていた。

でも、家で心配して待っている息子に、

いきなり、

「母が死んでしまうかもしれない」、

とはいえなかったのだろう。

その後、テレビでおなじみの、

ER（救急救命室）に入り、

ベッドで寝ている母と対面した。

きっと、今度も

防衛本能くんが登場して、

わたしを助けてくれる。

だが、

当てがはずれたようだ。

## 母の手

---

ベッドにいた母は、

意識があり、

身体中に管が巻かれた状態だった。

特に、口に入っている管から、

呼吸する姿は、とても苦しそうだった。

担当医がいうには、

意識があると、あらゆる自由がきかないため、

母にとって、負担になるので、

面会時間は、短めにしてほしいとのことだった。

そして、わたしは短い面会時間にもかかわらず、

何をいえばよいのかわからず、

家で飼っていた犬のことを思い出し、

「〇〇〇（犬の名前）が家で待ってるから、

「がんばって!」、とだけいい、



あとは、ひたすら母の手を握っていた。

すると、母は、

自分の力を振り絞るように、

ぎゅっと

わたしの手を握り返してくれた。

その手は、とてもあたたかく、

包み込まれるようだった。

いつの間にか、

元気づけようとしているわたしが、

元気づけられていた。

そんなあたたかい感覚に触れていると、

昔のことを思い出してしまい、

涙が込み上げてくる。

それを必死にこらえようとする。

でも、こらえようとすればするほど、

冷静さが失われていく。

「よかった～」

面会時間が短かくて。

なんとか、気持ちを抑えて、

病院を後にすることができた。

その後の担当医の説明では、

このまま容態が回復し、

体力が戻れば、

大腸がんの手術を予定しているとのことだった。

※倒れて運ばれたときは、腸閉塞の手術だけをやっています。

わたしたち家族ができることは、

母の回復を信じるだけだった。

そして、そのまた数日後の夜、

家族3人が自宅にいたとき、

病院から電話がかかってくる。

「容態が急変しました！」

「危険な状態ですので、

すぐに病院に来てください！」

慌てて車に乗り込み、

病院にむかった。

生から死へ

---

病院に着き、

母がいるE R病棟に入り、

母の姿をみる。

心拍数は、

0

になっていなかった。

ただ、

半開きになっている、まぶたから見える眼は、

死んでしまったかのような、

おうど色をしていた。

それはもう、

人の眼ではなかった。

担当医の説明では、

高熱によって、容態が悪化し、

脳に酸素が行き渡らなくなってしまったため、

脳が損傷を受けてしまったらしい。

脳のレントゲンを見ると、

きれいに脳のしわがなくなっていた。

もう記憶すら残ってない。

このまま、延命治療を行うことはできるが、

意識が戻ることはない。

いわゆる、

植物人間。

医者から、今後の治療方針を尋ねられる。

家族3人が出した答えは、

何の相談もなく、決まっていた。

「延命治療はしない」

母は、家族の判断によって、

正式に死ぬことが決まった。

ただ、今すぐに母が死ぬわけではない。

母に装着されている医療器具を、

徐々にはずしていき、

その過程で、母は息途絶える。

だから、いつ死ぬかはわからない。

でも、数日の間で死ぬことは決まっている。

次に、病院から連絡があるときは、

母が死んだときである。

地獄のような時間が始まる。

「結局最後までいえなかった。」



「ありがとう」、の一言。

まだ、母の意識があったころに、

言おうと試みたことはあるが、

この状況で、ありがとうなんていったら、

もう死ぬのが決まったみたいで、

いえなかった。

普通に生活してたときに、

いくらでも言える機会はあったのに。

気がつくと、年が明けていた。

お正月は、毎年、母が手作りのおせち料理を作っていた。

普段から、あまり家事をしない母であったが、

おせち料理だけは、ちゃんと自分で作っていた。

冷凍庫には、倒れる前日に、

おせち用に買った牛肉が凍らせてあった。

ただ、もう母のおせち料理は食べれない。

もう、お正月を一緒に迎えることもない。

大好きなお菓子を食べている姿もみられないし、

話すこともできない。

そんなことを考えながら、

ひたすら、

母が息絶える瞬間を待ち続けた。

終わりと、始まり

---

母が眠っている E R 病棟には、

患者の家族のために、

20 畳ほどの広い待合室がある。

その場所は、24 時間自由に出入りすることができ、

瀕死状態の患者が入院しているときなどに、

使用される部屋である。

部屋のなかには、内線電話があり、

何かあった場合は、その電話が鳴るようになっている。

その日も、夜から病院の待合室に入り、

母の死を待つ。

早く電話が鳴ってくれれば、

地獄のような待ち時間はなくなる。

でも、電話が鳴れば、母が死んでしまう。

早く鳴ってほしい。

でも鳴ってほしくない。

矛盾した心境が、

こころをえぐる。

結局、そのまま朝になった。

電話は鳴っていない。

朝10時過ぎ。

わたしと父は、朝ごはんを買いに、

母が好きだった、パン屋に向かった。

パン屋に到着し、パンを選び、

レジに向かおうとした瞬間、

父の携帯が鳴った。

病院に待機していた兄から、

母の容態が急変したと連絡が入る。

慌てて、会計を済ませ、急いで病院へ向かう。

病院につき、

E R 病棟へ向かい、

母のベッドに駆けよる。

まだ、人工呼吸器がついていたままだったので、

呼吸をしているようにみえたが、

母は亡くなっていた。

享年53歳。

救急車に運ばれて、12日目の出来事だった。

泣いた

泣きまくった

20年間生きてきたなかで、

一番泣いた。

死ぬのわかってたのに、

大泣きした。

どれぐらいの時間、

泣いていたのだろう。

気がつくと、病院の霊安室にいた。

母の顔は、眠っているかのように、

安らかで、声を掛けたら、

起きてきそうな感じがした。

その後、自宅に運ばれ、

葬式はせずに、

火葬場で、火葬のみを行うことになった。

これは、母が生前、こんなことをいていたからである。



「わたしが死んでも、葬式なんかしなくていい。

お墓にも入りたくないから、

お骨は海に撒いてほしい。」

そんなことで、葬式は行わず、

変わりに、火葬後、

みんなで、母のお別れ会をやることになった。

楽しく、賑やかに、お酒でも飲みながら、

母のことをみんなで、思い出す。

母もきっと喜んでくれるだろう。

楽しい企画も決まり、

あとは、火葬日を待つだけとなった。

## 棺に書いた言葉

---

わたしは、ふと母のことを思い出していた。

小学生のときに、

女の子にケガをさせてしまったことがあった。

わたしは、自分が悪いにもかかわらず、

自分の非を認めなかった。

そんなわたしに母は激怒した。

「女の子に謝ってきなさい。

謝ってこれないなら、

家には入れさせません。」

そのときの人生史上で、

もっとも、母が怒った瞬間であった。

「悪いことをしたら、謝れ」

すごく基本的なことだけど、

そういう大事な部分だけは、

とても厳しかった。

小学校の夏休み。

わたしは飼育係をしていた。

飼育係は、夏休みの間、

当番で、学校で飼われている、

ウサギや、チャボなどに、

エサを与えなければならない。

わたしの家は、学校から遠いこともあって、

エサやりをサボろうとしたことがあった。

それを見るなり、母は激怒した。

「動物だって、ちゃんと生きてるんだから、

ごはんをちゃんとあげてきなさい！！

サボったら、あなたにもごはんはあげません！！！」

あまり怒らない母だけに、

キレると、余計に怖い。

母は、何よりも道徳やモラルを大切にする人だった。

だから、そういったこと以外に、

怒られた記憶がない。

外で遊んで、服を泥だらけにしても、

笑ってたし、

雪だるまを家に持ち込んで、

家中がビシヨ濡れになったときも、

笑ってた。

皿洗いを手伝おうとして、

お皿を割ってしまったときは、

わたしがケガをしていないか、

心配してくれた。

家でゲームばかりしてても、

全然怒らなかったし、

勉強しなさいなんて、

絶対に言わなかった。

だから、学校のテストや、

通知表が悪くても、何もいわなかった。

晴れた日には、お弁当を作って、

公園に連れて行ってくれたり、

遊園地に連れて行ってくれたり、

友達みんなで、空き地のはらっぱで、

寝転んでみたり。

砂場で、一緒になって泥だらけになったり。

いま、心から思うことがあります。

母親があなたで、本当によかった。

あなたに育てられて、本当によかった。

わたしは知っています。

こんなに出来の悪い子どもを

信じ続けるむずかしさを。

わたしは知っています。

あなたが、自分の子どもを

自分の所有物ではなく、

一人の人間として、扱っていたこと。

わたしは知っています。

掃除ができなくて、

計算ができなくて、

言葉もあんまり知らない、

漢字は適当に覚えているし、



メモ書きをそこら中にするから、

どこにメモしたかわからなくなるし、

知らない話題でも、知ったかぶりで、

会話に入ってくるし、

効率悪いから、手間ばかりかかって、

1つの作業にすごく時間が掛かるし。

性格も天然ボケだから、

今まで、いっぱい人にバカにされてきたと思う。

たぶん、人生のなかで、100点なんか取ったことない。

火葬日当日。

火葬場に移動するまえに、

みんなで、棺に最後のメッセージを

書いた。

「今まで、ありがとう」

「ホントに出会えてよかった！」

「天国にいても、幸せにね！」

そんなメッセージで、

溢れているなか、

わたしは、

母に伝えたい言葉を探していた。

「子どもだからこそ、言える言葉」

## 「子どもにしか、言えない言葉」

わたしは、棺のど真ん中に、

誰も見えるような、

大きな字で、

誇らしげに、

最後の言葉をつづった。

「子育て100点」

